

# 近江八幡の聖徳太子



近江八幡観光物産協会

# 近江の聖徳太子

「和を以て貴しとなす」の十七条憲法。「日出る処の天子書を、日没する国の天子にいたす、恙なきや。」の遣隋使の派遣等、日本史上もっとも有名な人物の一人が聖徳太子です。

この聖徳太子が建立した寺院、彫刻した仏像、活躍を示す地名など、聖徳太子に関する文化遺産が最も多く残されている国が、実は近江なのです。その数は、法隆寺のある奈良県、四天王寺のある大阪府をはるかに越えています。

聖徳太子に、最も親しい国が近江です。

## 時空を超える聖徳太子

様々な事績を成し遂げた聖徳太子は、その死後間もなくから、信仰の対象となります。

そして、聖徳太子は「黒駒」と呼ばれる神馬に乗り、日本中どこにでも行くことができた、と信じられるようになります。近江の聖徳太子は、この太子を神様として崇める文化の中から生れた、時空を超えて活躍し続けるスーパースターなのです。

## 近江八幡の聖徳太子

近江八幡市にも聖徳太子の文化遺産が、数多く伝えられています。近江八幡に伝えられた聖徳太子の文化には幾つの特徴(謎)があります。

- ・聖徳太子は、山と水に関係する処にその姿が見える事
- ・聖徳太子と、観音様の姿が重なる事
- ・聖徳太子は、往来と交流の場に現れる事

まず、これらの謎(特徴)を解き明かしてみましょう。

## 謎解き(特徴) 1



### 長命寺山

琵琶湖越しに見た長命寺山。山が水を生み出し、その水が集い琵琶湖となる。

## 聖徳太子は山と水に関係する

聖徳太子に関係する寺院は山に多く、天台宗との関わりが深い、という共通点があります。日本に仏教を定着させた聖徳太子は、日本仏教の祖として信仰され、やがて、中国の「慧思」という僧の生まれ変わりとされます。慧思の弟子が中国の智顗で、智顗は天台仏教を確立させ、この智顗に学んだのが最澄です。慧思＝聖徳太子であるならば、天台宗は、聖徳太子に学んだ宗派となります。事実、最澄は聖徳太子を熱烈に崇拜し、後に、最澄自身が聖徳太子の生まれ変わり、と信じられるようになります。

最澄が、比叡山に延暦寺を開き、山に宿る自然の神と仏を融合させ、天台宗を開くと、天台系の寺院が次々に近江の山に建立されました。山は水を生み出す聖地です。

## 聖徳太子は観音様と重なる

聖徳太子が開かれた、と伝えられる寺院の本尊、或いは、太子が自ら刻まれた、と伝えられる仏像をみると、観音様、それも十一面観音、千手観音が多いことに気がきます。

聖徳太子の神格化が進むと、聖徳太子は観音様の生まれ変わりである、と信じられるようになります。観音様自身が、三十三の姿に変身する力を持っていますので、この変化身として聖徳太子が位置付けられたわけです。そして十一面観音は、仏教が日本の風土になじむに従い、水を司る女神として水源の山に祀られ、その力をグレードアップした観音様として、千手観音が登場します。聖徳太子関係の寺院が山にあることと、ここに、観音様が祀られることは、水を介した不離一体の関係でもあるのです。

## 謎解き(特徴) 2



### 願成就寺

願成就寺本尊十一面観音の前に掲げられた大提灯。聖徳太子でもある観音様の御利益を誇らしげに示している。

## 謎解き(特徴) 3



### 八幡堀

近江八幡の繁栄をもたらしたのがこの八幡堀。聖徳太子が建立した日牟禮八幡宮の前を流れる。

## 聖徳太子と往来交流

『日本書紀』等の信頼性の高い史料が語る、史実としての聖徳太子の行動は、断片的なものにすぎません。ところが、聖徳太子の神格化が進み、太子に対する信仰の熱が高まると、様々な伝記類が著されるようになります。特に平安時代中期に著された『聖徳太子伝暦』が、後の聖徳太子像を作る事に大きな役割を果たします。

この中で聖徳太子は、各地で農業振興のための土木工事を行うと共に、商工業の発展にも力を尽くした、とされています。水陸交通の要衝地である近江八幡には、人々の交流により、暮らしも、心も豊かになるよう意を尽くした、聖徳太子の姿が見え隠れします。勿論、人の交流の基本、恋愛成就も近江八幡に伝えられる太子の功德です。

さあ、近江八幡の聖徳太子を探しに出かけましょう。

# 長命寺の聖徳太子

## 観音浄土に居ます太子

近江八幡市長命寺町157

西国観音霊場として多くの巡礼者が参拝する長命寺。

長命寺の御本尊は、聖徳太子が、人々に健康で長生きすることの幸せが授かるよう祈念し、

自ら刻まれた観音様と伝えられています。

琵琶湖に面して建つ伽藍からの景観は、まさに観音浄土を思わせる美麗なる景色です。

たけしうち (たけのうち) のすくね

## 武内宿禰と聖徳太子

第十二代景行天皇の時代に、近江に縁深い神功皇后に仕えた武内宿禰がこの地に至り、柳の霊木に「寿命長遠諸願成就(長生きして全ての願いをかなえたいものだ)」と彫り、長寿を祈願しました。この功德により宿禰は三百歳もの長寿を得ることができました。

時代が降り、聖徳太子が仏世界から日本の皇子に生まれかわり、何かに導かれるように姨綺耶山に至りました。すると、一本の古木から瑞光が発するのが見えました。太子は怪しみ、この霊木を良く観ると、観世音菩薩の種子(ロゴマーク)と共に、宿禰が記した「寿命長遠諸願成就」の文字が現れました。感動した太子は、この霊木に観音菩薩の尊像を刻み、寺院を建立しようと考えました。



ろくしょうこんげんようこうせき

### 六処権現権現向石

本堂に覆い被さるように<sup>さつりつ</sup>屹立する巨岩。武内宿禰はこの岩に祈り、三百歳もの長寿を得たと伝わる。

## 聖徳太子が刻んだ観音様

しかし、太子が霊木に刃物を当てることを逡巡していると、天上から「如是諸願成就円満(構いませんよ、観音の姿をこの木に現わせば、あなたの願いは叶うでしょう)」という声が響きました。喜んだ太子は、自ら、この霊木に十一面千手合体の尊像を刻まれました。その時、山中の瀧より、光明輝く一寸八分の聖観音像が現れました。太子は自分の願いが成就する靈験と、大いに悦び、自ら刻んだ尊像の中に、この観音菩薩像を納め、七堂伽藍を建立し、彼の尊像を御本尊として安置し、「寿命長遠諸願成就」の文字を略して「長命寺」と名付けました。本堂には、縁起を象徴するように、十一面観音、千手観音、聖観音の三体の観音様が安置されています。



### 長命寺本堂

中世末に建立された、天台密教寺院の典型的本堂。内陣の巨大な厨子の中に三体の観音像が安置されている。



### 長命寺参詣曼荼羅

戦乱からの復興のための浄財を集めるために作成されたプロモーション絵画。天智天皇の縁起も描かれる。

## 天智天皇と長命寺

時は降り、聖徳太子の一族を滅ぼした蘇我氏を倒した天智天皇が、近江に都を置きました。天皇は、聖徳太子に導かれるようにこの寺を参拝し、様々な願い事を御本尊に託されました。そして、自ら柳の枝を手折り、本堂の横に刺し「私の願いが叶うならば、この柳の枝に奇跡を示してください」と祈ると、不思議なことに、この柳が一夜にして大木となりました。天皇は、観音様が願いを聞き届けてくださったと、大いに悦び、これより長命寺を「天下泰平宝祚長久(世の中が平穏無事で、天皇家が代々続きますように)」の勅願所として、篤くこれを敬いました。長命寺御詠歌の「柳に長き命寺」は、これら聖徳太子・天智天皇とのつながりから生まれたものです。

## 長命寺本堂と閼伽井堂

現在の長命寺本堂は、大永二年(1522)に再建した建物で、ゆったりとした屋根の勾配が美しい、典型的な天台様式の建物です。御本尊の三観音は、内陣の大きな厨子の中に安置されていますが、この厨子は地面に石垣を築いて、その上に建っています。つまり、観音様は山の地面に立っておられることになります。

本堂の横に、御本尊にお供えする閼伽水を湛えた閼伽井堂が建っています。よく見ると、この水は本堂の基壇から流れてきています。本堂は湧水の上に建てられ、ここに、聖徳太子が刻まれた観音様が祀られているわけです。長命寺は水を祀る寺なのかもしれません。聖徳太子と山と水との関係が現れています。



### 本堂と閼伽井堂

本堂の基壇に寄り添うように建つ堂が閼伽井堂。閼伽水は本堂の基壇から流れ出ている。堂の本尊は水に関係深い十一面観音。



### 長命寺の伽藍

柿・檜皮で葺かれた屋根の連なりが美しい。山の精の化身でもある聖徳太子の心が投影されているように見える。いずれも重要文化財。

## 長命寺の伽藍

長命寺の伽藍は、長命寺山の中腹に、琵琶湖を見降ろすように建ち並んでいます。三重塔・護摩堂・本堂・三仏堂・護法権現社拝殿・護法権現社・鐘楼と並ぶ建物の屋根は、柿・檜皮の植物材で葺かれています。近江にある、天台宗に関係する古い寺院の本堂の屋根の殆どは、植物質の材料で葺かれています。寺院の屋根は瓦で葺かれることもあるのですが、神社の屋根が瓦で葺かれることは決してありません。近江の天台系寺院は、より、山に宿る神様に近い仏様を祀っているためかもしれません。

長命寺の伽藍の屋根の連なりは、山の自然に溶け込んだ、神と仏と人とが混然一体となった、世界にここしかない、美しくも神秘的な、近江の聖徳太子を感じる空間です。

# 八幡山・願成就寺と 聖徳太子

神仏が溶けあう心地よさ

願成就寺 近江八幡市小船木町 73-1

近江八幡の町並みを見守る様に  
聳える八幡山。

戦国時代の終わり頃、この山には豊臣秀吉の命により豊臣秀次が八幡山城を築城しましたが、それ以前は、聖徳太子が建立した社寺が建ち並んでいた、と伝えられています。

## 八幡山と聖徳太子

地域に伝わる縁起に拠れば、霊地を求め近江にやってきた聖徳太子は、この山の上に瑞雲がたなびくの見、「この山はただならぬ山である」と感じ、山中に分け入り、山頂に至ると、眼前には神々しく輝く琵琶湖の水面と、それを取り囲むように連なる比良、比叡の山並みが広がっています。そして、先日建立を誓われた長命寺も見えます。聖徳太子は思わず手を合わせ、佇んでいると、まばゆく瑠璃色に輝く神々が現れ、太子に向かい「湖水の国、近江は、宇宙(世界の中心)です。ここに多くの社寺を建立し、山の神仏。水の神仏を祀れば、日本は、その加護により富み、栄えることでしょう。そのためにあなたを近江の国に招いたのです」と、告げられました。



### 西の湖より八幡山

かつて、八幡山は湖水に囲まれた独立峰であった。西の湖と共に仰ぐ八幡山は、水の神が宿る聖山に見える。

がんじょうじゅじ

## 願成就寺と聖徳太子

八幡山は、鶴が翼を広げる様に似ていることから鶴翼山とも呼ばれ、願成就寺が建つ鶴の頭の部分が、鶴頭山、あるいは観音山と呼ばれています。観音山の名前は、願成就寺の本尊として祀られる十一面観音を聖徳太子が、自ら刻まれたことに由来します。

八幡山で出会った神々の導きにより、聖徳太子は、近江に四十八の社寺を建立することを誓われ、近江の霊地に次々に社寺を建立しました。そして、その最後に、神の啓示を受けた八幡山に建立したのがこの寺で、太子の願いが成就した寺、ということで「願成就寺」と名付けられました。願成就寺は八幡山の山中にありましたが、八幡山城の築城により、現在の場所に移されました。



### 願成就寺本堂

右が、十一面観音と聖徳太子二歳像および、日牟禮八幡宮本地阿弥陀如来を祀る本堂。左が五大明王を祀る護摩堂。



### 願成就寺十一面観音

聖徳太子作と伝わる、櫃の一本から彫りだされた霊像。化仏は完全には彫られておらず、まるで木の塊のよう。

## 願成就寺本尊十一面観音

願成就寺の御本尊は、聖徳太子が自ら霊木に一刀三礼の元に刻まれた霊像で、聖徳太子が四十八の社寺建立の誓願を建てられたことに因み、四十九年に一度、開扉される秘仏として、厨子の奥深くに安置されています。

お像は、木の肌を残し、彩色を殆ど施していません。また、頭上の化仏は髻と一体となっており、まるでこの部分は、木の塊のように見えます。さらに、お体には、細かな鑿の跡がたくさん残されています。このような技法は鈍彫とか、荒彫とか呼ばれ、霊木に宿る神が、仏の姿を借りて出現する、劇的な様子を表現した、とする考えがあります。八幡山の霊木に宿る神が、聖徳太子より、願成就寺の御本尊として生まれ変わりました。

ひ む れ

## 聖徳太子と日牟禮八幡宮

聖徳太子は八幡山の山頂に「上の社」を建立し、この別当寺院として興隆寺を、そして山麓に「下の社」を建立し、この別当寺院として建立されたのが、願成就寺です。

天正十三年(1585)、豊臣秀吉は近江支配の拠点として八幡山に八幡山城を築城させます。この時、上の社は麓に降ろされ、下の社と合祀し、これが現在の、日牟禮八幡宮となりました。神社名の「日牟禮」の名前は、応神天皇に由来するとされています。一方、聖徳太子とも縁深い古代朝鮮半島の言語では「ムレ」は山を指し、「ヒ」は御霊を指すともいわれています。まさに、神宿る聖なる山であり、近江八幡に繁栄をもたらした山です。



### 日牟禮八幡宮と八幡山

聖徳太子が建立し、日牟禮八幡宮に合祀された上の社は、画像中央の、八幡山の山頂にあったとされる。

## 聖徳太子の願成就寺は何処？

聖徳太子が願成就寺と共に建立した興隆寺は、日牟禮八幡宮の背後に延びる尾根上の、大平という所でしたが、八幡山城の築城時に降ろされ、現在の、近江八幡市多賀町の興隆寺となった、とされています。

では、願成就寺はどこにあったのでしょうか。その有力な候補地が、八幡山城の秀次館跡です。秀次館は、まっすぐに伸びる通路の突き当りにあり、広い平場が山腹に展開する構造で、天台系の山寺の構造に酷似しています。さらに、秀次館を護る様に展開する西尾根郭群の石垣には、石仏・石塔などの転用石が大量に使われています。これらは、八幡山城の築城の際、尾根上にあった、願成就寺に伴う墓地から掘り出された可能性があります。



### 八幡山城西尾根の石垣

石仏・石塔が大量に用いられている。これらの石造物は、元の願成就寺に伴う墓地に由来すると考えられる。

# 数珠玉

近江八幡市玉木町



願成就寺を建立されたとき、聖徳太子は「八幡山の周辺には良材がたくさんある。これを使って仏と人を結ぶ数珠の珠を造りなさい。」とその製法を人々に教えた、と伝えられています。

## 近江八幡の数珠玉

聖徳太子の教えにより、八幡山の麓では数珠玉の生産が盛んとなりました。珠の素材となる梅・桑・桜等の良木に恵まれたことも、生産を後押ししました。江戸時代に入り、数珠の需要が高まると、数珠玉生産は活況を呈し、全国に流通するほとんどの数珠玉が、玉木町などで生産されていました。玉木は数珠玉の木の意味です。現在でも、近江八幡は、全国有数の数珠玉生産地です。

しかし、近江八幡で数珠が生産されることはありませんでした。珠は京都に出荷され、ここで紐を通し、飾りをつけ「京数珠」として販売されたのです。作家白洲正子は「近江は楽屋裏の国」と表現しましたが、まさに八幡の数珠玉もその典型と言えます。



### 数珠玉アクセサリー

木を丸く削り出す数珠玉造りの技法を利用して作られた様々なアクセサリー。まさに木の宝石、いや宝樹。

## 聖徳太子と数珠玉

数珠玉は、木の芯を丸く削りだします。芯は心に通じ、木に宿る自然の姿、言い換えれば、神様を形としてあらわした、ともいえます。珠自体が、聖徳太子が願成就寺の十一面観音のお姿を、霊木の中から彫りだし、招いたことに通じる、霊的パワーの籠った工芸品です。

近江八幡では、数珠玉製作の技術を生かし、美しい木肌の木から生まれた、様々なアクセサリーが造られています。この中には、淡水真珠とコラボした作品もあります。聖徳太子の伝記には、合掌する太子の手から舍利(お釈迦様の遺骨)がこぼれ落ちた等、仏舍利が度々登場します。様々な形の淡水真珠は仏舍利を思わせます。山の気・湖の気・聖徳太子の気が籠った逸品が生まれました。



### 数珠玉と淡水真珠

聖徳太子が教えた数珠玉と、琵琶湖の精とも云うべき淡水真珠が合わさり、新しい物語が生まれる。

# 織田信長と聖徳太子

## 太子のパワーを頂く

安土城 近江八幡市安土町下豊浦 6220 他

會勝寺 近江八幡市安土町下豊浦 6220

浄厳院 近江八幡市安土町慈恩寺 744

織田信長が天下布武の拠点として築城した安土城。

安土城が建っていた安土山にも聖徳太子の姿が見え隠れします。

そこには優しく慈悲深い聖徳太子とは異なる、意外な太子の姿が。。。。

## 安土城と聖徳太子

織田信長が安土城を築城した安土山には、次のような縁起が伝えられています。昔、聖徳太子が、近江に四十八か所の寺院を建立するため、霊地を求めて歩かれていました。聖徳太子が安土山の麓にさしかかると、山頂に瑠璃色の光が輝くのを見、山に登ると、ここでまた、近江を司る神々に出会いました。神は聖徳太子に「この湖水に浮かぶ山は、水の精が宿る山です。人々に水の恵みが永遠に続くように精舎を建立し、水の精を祀りなさい」と告げられました。感動した聖徳太子はここに寺院を建立し九品寺と名付け、山中で得た霊木に千手観音像を自ら刻み安置しました。この像は、安土山の山麓に建つ、會勝寺観音堂の本尊として、今も伝えられています。



安土廃寺出土 軒丸瓦（県立安土城考古博物館提供）

安土山から出土した古代の軒丸瓦。聖徳太子建立の九品寺の存在を裏付ける資料と言えるかもしれない。

## 織田信長と聖徳太子

聖徳太子が十六歳の時、仏教の受容を巡り、物部守屋との戦いに突入し、これに勝利しました。このことから、聖徳太子は戦の神として、武家たちの信仰を集めるようになります。織田信長もその例外ではありません。信長は、聖徳太子から、「あなたはこの戦乱を終わらせる力を持っている。これを成就させ、あなたを守護するため、熱田神宮が蔵する源頼朝由来の太刀をあなたに授ける」というお告げを受けた、と伝えられています。

また、信長は、城下に浄厳院を開くにあたり、八幡山に聖徳太子が建立した興隆寺の弥勒堂を移し、阿弥陀堂としました。信長が安土山に安土城を築城した理由の一つに、聖徳太子に対する信仰があったのかも知れません。



浄厳院本堂

織田信長が、八幡山にあった興隆寺の弥勒堂を移したとされる。ここで安土宗論が交わされた。

# 観音正寺と聖徳太子

山に宿る太子の力が命を磨く

観音正寺 近江八幡市安土町石寺2

湖東平野に聳える織山は、標高は 430m 程とそれほど高くはありませんが、近江の平地の殆どの場所からその姿を望むことができる聖なる山として信仰されてきました。

ここに聖徳太子に関する複数の縁起が伝えられています。

## 縁起 1

### 聖徳太子と人魚

聖なる織山に建つ観音正寺には、聖徳太子と人魚との出会い、そして太子と神・仏との命や自然を介した交流の縁起が、伝えられています。

聖徳太子がこの地を訪れた時、人魚が現れ太子に懇願しました。「私の前世は琵琶湖の漁師でした。漁の腕前が良く、面白いように魚を捕ることができました。私は食べきれないほど、売り切れないほどの魚を捕り、無益な殺生を重ねました。琵琶湖の神々は私の行いに怒り、私を人魚として転生させ、私は、前世の業に苦しむ毎日を送っています。どうか私を成仏させてください」人魚を憐れんだ聖徳太子は、その願いを聞き入れ、一寺を建立し、自ら千手観音像を彫刻し、本尊として安置しました。



観音正寺の人魚

岩山に祀られた観音菩薩を配する人魚の像。聖徳太子は観音菩薩の化身として信仰された。

## 縁起 2

### 神仏の啓示を受ける聖徳太子

聖徳太子がこの地に至った時、巨岩の上で舞う天人の姿を見、この岩を「天楽石」と名付けました。現在の観音正寺奥の院の磐座です。

聖徳太子はこの天楽石の岩肌に妙見菩薩を始めとする五体の仏の像を刻んだと伝えられています。

その後、天照大神と春日明神のお告げによって、聖徳太子が山中に湧き出る霊泉の水で墨を摺り、千手観音の像を描きました。

その後、今度は、釈迦如来と大日如来が現れ、観音様の化身である聖徳太子に千手観音像を霊木に彫刻するように告げられました。聖徳太子は二仏の啓示に随い、千手観音像を彫刻し、安置しました。



天楽石

この岩の上で天人が舞い踊った。観音正寺の本体であり、現在は、観音正寺の奥の院として祀られている。



### 観音正寺奥の院

奥の院の前には鳥居が建つ。観音正寺という寺院の奥の院ではあるが、神と同体であることを象徴している。

## 観音正寺奥の院

聖徳太子の前に天人たちが現れ舞い踊った巨岩が天楽石で、現在も観音正寺奥の院としてお祀りされています。

観音正寺山上駐車場から、本堂に向かう参道の横に、石の鳥居と、奥の院を示す石標が建っています。ここから急な石段を登ると、息を呑むような巨岩の折り重なりが現れ、その一部が洞穴状になっています。この岩の折り重なりが観音正寺の始まりで、典型的な磐座信仰の姿を留めています。

磐座に対する信仰は、仏教が日本に渡来する以前からありました。この聖地に仏教寺院が建立されました。やがて、日本古来の自然物に対する信仰に、仏像に対する信仰が合わさり、その壁面に仏像が刻まれました。

## 観音正寺の霊泉

観音正寺の本坊前には、絶えることなく湧き出る泉があり、ここに水神が祀られています。聖徳太子が、天照大神と春日明神の啓示を受け、千手観音像を描くための墨を摺った霊泉とは、この泉なのかもしれません。

観音正寺は、山上の寺院であるにもかかわらず、彼方此方に湧水を見ることができます。近江の山々には、聖徳太子縁起を伝える寺院が、多く伝えられていますが、その多くは「水」のある所に建立されています。寺は、仏に仕える僧が暮らす場でもあります。僧という人間が暮らすため、最も必要だったのが「水」でしょう。仏に捧げられ、僧の命を継ぐ水は、やがて細流となり、麓に下り、田畑に入り、人々の命を涵養します。



### 霊泉

観音正寺庫裏の前から絶えず湧き出る霊泉。この水が麓を涵養する水の始まりとなる。まさに神宿る水。

## 観音正寺

観音正寺は、叡山の自然に宿る神様と観音様が混然一体となった、暖かでいて、爽やかな気配の漲るお寺です。本来、日本人は神様と仏様をさほど区別することはなく、ともに恵みをもたらしてくれる、ありがたい存在として、崇めてきました。天楽石を奥の院とし、霊泉、そして千手観音を共に祀る観音正寺の佇まいは、人が、自然の中で生かされている事を教えてくれます。

御本尊の千手観音を参拝し、境内に立ち、山内の深い緑、そして、足元に広がる素晴らしい景色に触れた時、自然の中に溶け込んでゆく心地よさが実感されます。そして、「今も、私はあなたのそばに居ますよ」という、聖徳太子の優しい声が、聞こえてくるように感じます。



### 観音正寺本堂

再建が成った観音正寺の本堂。本尊として、聖徳太子に縁深い白檀木を刻んだ千手観音像が安置されている。

# 奥石神社・長光寺・ 廣濟寺と聖徳太子

## 太子が招く幸福

奥石神社 近江八幡市安土町東老蘇 1615

長光寺 近江八幡市長光寺町 694

多くの人たちが行きかう中山道。  
この地に聖徳太子と妃の姿があります。  
聖徳太子夫妻は人と人を結び、そして  
幸せに導いてくれます。

おい そ

## 老蘇の森と聖徳太子

聖徳太子は、近江に数多くの社寺を建立するため、仮宮を造り、ここに最愛の妃、膳部大郎女と共に度々逗留されました。その仮宮を置いた場所が、老蘇の森です。その昔、この地域は地が裂け、水が湧いて人の住めるところではありませんでしたが、石部大連が神々に祈願し木々の苗を植えたところ、たちまちにして大森林となり、石部大連の長寿にあやかり、この森を老蘇の森と呼ぶようになったと伝えられています。

また、日本武尊を救わんと、妃の弟橘媛命が海神を鎮めるために、海に身を投げたとき、妃は懐妊していましたが「私の魂は、近江の老蘇の森にとどまって安産の守り神となる」と言い残した、と伝わっています。



### 奥石神社勧請吊

奥石神社の参道は老蘇の森の中を通る。参道には、様々な祈願が込められた勧請吊が架けられている。



### 奥石神社

提灯に、鎌を交差させた神紋が描かれる。奥石神社は、「かまの宮」とも呼ばれるが、これは蒲生の宮が変じたもの。

## 奥石神社と聖徳太子夫妻

聖徳太子は、老蘇の森の仮宮から黒駒に乗り、近江中に建立している寺院の監督に赴く生活をおくっていました。そんな中で妃が懐妊し、臨月を迎えましたが、難産に苦しみました。聖徳太子は、妃に「神仏の力にお縋りすれば、きっと無事に子供が生まれます」と告げると、妃は「解りました、神仏にお祈りします。そして無事、子供が生まれたら、お礼のために寺を建立しましょう」と、手を合わせたその時、黄金に輝く光が飛来し、妃の口に飛び込むと、苦しむことなく、皇子が生まれました。

後に、聖徳太子の仮宮が置かれた老蘇の森には奥石神社が鎮座し、弟橘媛命の神徳、膳部大郎女の安産に因み、女人守護、安産守護の神様として崇敬されています。



### 長光寺本堂

聖徳太子夫妻が刻んだ千手観音を本尊とする。太子夫妻の縁にあやかり、安産祈願の観音様として名高い。

## 長光寺本尊千手観音

聖徳太子は、妃が無事出産されたことに感謝し、霊石の傍らの栴檀香木に、太子自ら、五色の光の中に現れた千手観音の尊像を刻みました。そして、世の人達に恋愛成就、子宝成就、無事安産など子孫繁栄の喜びが授かるよう、願いを込め、霊石の上に安置しました。これが子安観音として信仰を集めている、御本尊の千手観音像です。

さて、栴檀香木に千手観音像を刻まれましたが、その枝の部分の部分が余りました。聖徳太子は、長光寺が栄え、本尊とした千手観音の功德が永遠に続くことを願い、その枝を地に刺したところ、太子の願いに感応したのか、枝は見る間に大木となりました。これが、本堂前に立つ「花之木」の巨木で、今も太子と人々を結び続けています。

## 光の源の寺 長光寺

皇子の誕生を喜んだ聖徳太子夫妻は、妃の口に飛来した黄金の光の出所を、仕えていた武河綱に命じて探させました。河綱は、光の飛んできた南西を目指し、老蘇の森から三十丁ばかり離れた山の麓に、栴檀香木と、その元で、五色に輝く霊石があるのを見つけ、急いで聖徳太子に報告しました。喜んだ太子がその場所に到着し、なおも光り輝く霊石を拝すると不思議にも、その光の中から千手観音のお姿が現れました。感動した聖徳太子は、武河綱に命じて、この霊石を覆うように寺院を建立させました。この寺は、武に造らせた寺ということで、武作(むさ)寺、と呼ばれていましたが、やがて、妃に降臨した霊光に因み「長光寺」と呼ばれるようになりました。



### めんのう 伝瑪瑙

本堂内本尊および聖徳太子像の前に置かれている霊石。ここから発した光が聖徳太子妃に安産をもたらした。



### 愛之神

長光寺の程近くに鎮座している。「愛之大神」と刻まれた立石を御神体としている。

## 愛之神

長光寺の背後の山の中腹に鎮座する「十二神社」は、江戸時代までは長光寺と一体の神社でした。長光寺と十二神社の周辺には、薬師十二神、弁才天等、多くの神仏が祀られていた、と伝えられています。この十二神社に関連し「愛之神」という、素敵な名前の小さな神社が今も鎮座しています。

御祭神は「愛之大神」で、子供の守り神として、近隣の信仰を集めています。この神様の由来は良く判りませんが、恋愛成就、子宝成就、安産成就の結果生まれた子供たちの、健康で、健やかな成長が託されています。まさに、この地に伝わる聖徳太子夫妻の「愛之物語」を象徴しているようです。

# 岩戸山十三佛と 聖徳太子

太子の元に集う神仏そして人

岩戸山十三佛 近江八幡市安土町内野

箕作山山系の一角に美しくそびえる岩戸山。

その峩々たる岩肌には、人々の様々の願いを受け止め、叶える神仏が宿り、その中心に聖徳太子が刻まれた、石の仏達が鎮座しています。

## 岩戸山十三佛と聖徳太子

昔、岩戸山の麓を通りかかった聖徳太子は、山上に唯ならぬ靈威を感じ、急ぎ山中に分け入りしました。すると、山頂の巨大な岩に、十三佛が現れ、口々に人々を済度するための聖詩を唱えていました。仏達を拝謁した聖徳太子は、この仏達の姿を長く留め、人々に安寧をもたらそうと考えました。しかし、急いで山に登って来たため、仏の姿を写す道具を持っていませんでした。思い悩んだ聖徳太子は、意を決して自らの爪で、岩肌を彫り、仏の姿を留めようとされたところ、不思議にも岩は粘土のように柔らかくなり、太子は難なく仏の群像をこれに刻む事ができました。彫り終えた仏達を聖徳太子が礼拝すると、仏たちは金色の光を放ち、元の岩に戻りました。



### 岩戸山十三佛

聖徳太子が、自らの爪でその姿を彫ったとされる摩崖仏。岩肌を覆うようにお堂が建てられている。

## 岩戸山の神仏たち

岩戸山の山頂近くには、聖徳太子が岩肌に刻まれた十三佛を覆うようにお堂が建立され、麓の人達がこれを手厚くお祀りしています。この十三佛を中心に、岩戸山の山頂、山腹には、様々な願いが込められた神仏たちが祀られています。その中には具体的な仏像の姿を持つものもありますが、岩、樹木、洞穴等の自然物にも名前が付けられ、様々に飾られ、お祀りされています。

これらは、日本に仏教が渡来する以前からあった、自然に神が宿る、と考える信仰に基づいています。ここに聖徳太子が現れ、自然の岩に宿る神々を十三佛という仏の形で招きました。日本の神々と、仏教の仏達の融合を試みた太子の「和を以て貴しとなす」の心のようなのです。



### 岩戸山の祭場

十三佛に至る参道のいたるところに、個人的に招かれた様々な神仏が祀られ、紅白の布で荘厳されている。



### 聖徳太子説法石と聞き入る動物

奥の四角な石が説法石。細長い石は鶴、その右の石は蛙を象ったと伝わる。

## 近江八幡の聖徳太子の足跡1 教林坊

聖徳太子が叡山の麓を歩いていると、清浄な気が流れてくるのを感じました。聖徳太子がその源を求めて叡山の山中に分け入ると、巨大な岩があり、気はここから穏やかに流れていました。聖徳太子は「この岩は、世のために尽くす修業を行うに相応しい」と感じ、この岩上に座り、静かに瞑想すると、太子は何とも言えない爽やかな気分になり、自然に、神仏を湛える言葉が口から出てきました。気が付くと、語り続ける聖徳太子の元に様々な動物たちが集い、太子の言葉に耳を傾けていました。聖徳太子が座った大岩は、教林坊の境内にあり、「聖徳太子説法岩」と呼ばれています。この石の下には、聖徳太子が自ら石に刻んだ「赤川観音」が祀られています。

## 近江八幡の聖徳太子の足跡2 王の浜

近江八幡の湖岸や、内湖の周辺には「宮ヶ浜」「白王」等、雅な雰囲気の名を持つ処がありますが、「王の浜」もその一つです。現在は陸地ですが、少し前までは琵琶湖から続く入江でした。地名の由来には諸説あり、応神天皇が近江に行幸した際に上陸したところ。木地氏の祖として名高い惟喬親王が訪れたところ、等ともいわれています。

この中に、聖徳太子が近江に来られた際に、上陸したところである、という伝承もあります。この周辺には長命寺、八幡山、願成就寺、安土山等、聖徳太子に関連する旧跡が密集しています。もしかすると、社寺の建立や、殖産興業のため、足繫く近江に通われたという聖徳太子が、ここの港を度々利用されたのかもしれませんが。



### 王の浜若宮神社

かつての入江の奥まった所が王の浜と呼ばれている。鎮守の若宮神社には勸請吊が架けられている。



### 青根天満宮

八幡山の南の中腹に鎮座する。現在は菅原道真を祀る。拝殿の横に杉の御神木が神々しく立っている。

## 近江八幡の聖徳太子の足跡3 青根天満宮

聖徳太子には、さまざまな伝承が伝えられています。八幡山の周辺には、願成就寺の項で紹介したほか、この地に來られた聖徳太子が、仏教の受容を巡り、争い、倒した、物部の守屋の冥福を祈るため、四箇寺を建立すると誓願され、次々に伽藍を建立したと伝えられてきます。この内、西方寺(浜の御坊・佛光寺)と願成就寺が現存し、万願寺が船木の近くにあったと伝わっています。

一方、青根天満宮には「香梅寺」というお寺があり、聖徳太子作の阿弥陀如来を祀っていた(現在は願成就寺に安置)、という記録があります。確証はありませんが、香梅寺が万願寺なのかもしれません。調べてみませんか？聖徳太子縁起には、夢がいっぱい詰まっています。

# 近江八幡の聖徳太子



## インフォメーション

この冊子に関するお問い合わせ先

一般社団法人 近江八幡観光物産協会

〒523-0864

滋賀県近江八幡市為心町元9番地1（白雲館内）

TEL：0748-32-7003

FAX：0748-31-2393

URL：<https://www.omi8.com>

## 近江八幡の聖徳太子

発行 2021年3月

発行者 一般社団法人 近江八幡観光物産協会

編集 NPO法人 歴史資源開発機構

定価 200円